

綾守竜樹

表紙イラスト：あかめ

試し読み版

私のお嬢様、
わたしのたいせつなひと

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『私のお嬢様、わたしのたいせつなひと』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



私のお嬢様、
あたしのたいせつなひと

綾守竜樹

表紙／あかめ

登場人物紹介

Characters

フリーダ

廃棄処分されるはずだったが、遥によって救われ、そばに置かれている女性型ヒューマノイド。

はるか

遥

フリーダの主人である令嬢。

 【転載開始】

■ 読日新聞

×月24日、I県T市の民家に、児童相談所の依頼を受けた警官二名が突入し、同家地下室からKさんを保護した。Kさんの父親は同市にある独立行政法人・S研究所の主任研究員で、長期に渡ってKさんを監禁していた疑いが持たれており（中略）

 【転載終了】

Freda > > …… 5時59分30秒 …… 56秒、 57秒、 58秒 …… 起動。 ^ ^ E O M

電糸脊髄ラン、小電脳L A Nラン、中電脳間電脳グリーン、大電脳ヴェンツェル中枢ラ
 ン、暫定C3確立。

Freda > > コマンド。全睡眠行程キル …… 全電糸チエック、全電筋チエック、炭素梓チエ
 ック。 ^ ^ E O M

A G M。 个体識別番号 X X X 02、女性型汎用ヒューマノイド、製造総責任者マエストロ狩生・星丸ファクトリー002・コスモインダストリアルグループ、オーナー登録者フジワラハルカ、登録者設定名称カリユウフリーダ。

Freda √√フリーダ覚醒。 ^ ^ E O M

私は眼瞼筋を動かした。目を開けた。首を右に捻った。隣を確かめた。

お嬢様が、柔らかな寝息をくり返されていた。

瞳を搾り、お嬢様の顔面をチェック。一週間分の『藤原遥アーカイブ』にクロスをかけた。経時の変化、すなわち健康状態を確かめた。

Freda √√……………。 ^ ^ E O M

黒い髪に、白い肌。肩までの黒髪は、前日比1.3ミリ長だ。顔のかたちは、ほぼ完璧な卵

形。頬から顎にかけてのカーブが小気味よい。眉幅は7.23ミリ、世間一般の基準からすれば極太だけれど、それが高い鼻の冷たい印象を和らげている。割と厚めの唇は、みずみずしい薄桃色だ。

要するに、類希なるヤマトナデシコ顔である。前日と比べて、少し疲労しているようだ。

「……おはようございます、遥様」

私は小声で呟き、起きあがるための恒例行事を行った——私の胸あたりに伸ばされているお嬢様の手を外し、タオルケットのなかに戻してさしあげた。

「……………ん……………う……………」

しまった。私はしばらく固まっていた。

「……………もー……………そこは……………いじわ……………る……………」

お嬢様の長い睫毛は、一本線のままだった。良かった。裸のままベッドから抜けだし、

隣の控え室に入った。

ワードローブからお嬢様オススメの下着を取りだす。鏡のまえに立ち、ブラジャーの前上がり、後下がりを確認した。続いて制服を取りだし、タイから黒靴まで身に着ける。髪をまとめてポニーテールに結わえ、エプロンの帯を締めた。

完了。

脳内でお嬢様の行動予定をチェックする。

Freda √ √ …… X月12日、テスト休み。12時00分までノーリタスク。15時15分から当家主催のお茶会、17時00分まで。^^EOM

お茶会における女主人役までフリーなのだから、ゆっくりされるのかもしれない。モニングルティイは、支度だけに留めておこう。疲労回復を考えて、茶葉のなかにカモミールをプラス。それからコック長に、朝食のメニュー変更をコマンドした。

Freda √ √ …… ビタミンC、B1、E増量。ブドウ糖微増。脂肪、動物性タンパク質減。季節と遙様の好みからいって、キウイフルーツとハチミツを使った一品が望ましい。^^EOM

送信。ベッドルームに戻った。

脇のイスに腰かけて、お目覚めを待つ。薄いタオルケットごしに浮きあがる遥様のお体を見つめる。

起きているときはそう感じさせないのだけれど、お嬢様はかなり小柄だ。先日の身体測定において、

『……遥の見かけの身長つてさ、怒ったときのクマッと同じ原理が働いているよね』

と揶揄されたそうで、その日はちよつとご機嫌斜めだった。それを教えてくださったときの口元を思いだすと、私の頬の電筋は、なぜか緩んでしまう。

お嬢様の寝姿。ストレートの髪が、枕を行儀良く隠している。艶やかな黒のなかから、美しい耳が突きだしている。

首はほっそりと長い。それとは対照的に、乳房は私の掌ではつかみきれない大きさだ。腹部に入ると再びくびれ、腰のあたりでふくよかさを取りもどす。

手足はモンゴロイド離れた長さで、なかでも足はしなやかな芸術だった。こうして見ているだけでも飽きない美の構造体に、私は指と舌で――。

「……………」

なぜだろう、と思う。お嬢様はどうして、私を廃棄処分から救いだし、そばに置いてく
ださるのだろうか？ のみならず、私と――。

Freda √ √ …… スクリプトIIエラー発生、言語化不能…… 顔面毛細血管エラー…… コマン
ド、鼓動スピード減速。∧∧EOM

これが、人間で言うところの「頬が赤くなる」なのだろうか？ 私はお嬢様の姿を見て
いられなくなって、うつむいた。強制スクリプトを書き、このエラーを処理していると、

「……………おはよ」

6時36分、遥様がお目覚めになられた。重そうな瞼の影から、鳶色の瞳をちらりと覗か
せられた。

「お、おは……………」ヒューマノイドなのに、どもってしまった。「……………お、おはようございます」

「いま……なんじー？」

目に輝きが灯ると、お嬢様はその存在感を劇的に変えられる。厚い雲間から現れた太陽のように、温かくて柔らかかな力を發揮される。

「6時37分です」

「まだそんな時間？ ……んー、もう少し寝ていたかったかも」遙様は、私の顔を見て悪戯っぽく笑った。タオルケットを鼻の高さまで引きあげて、「昨日のフリーダったら、とっても激しかったしー」

くすくす、とやはり悪戯妖精のように笑われた。

「……激しい？」私は動揺した。「すみません、何か痛みを伴うようなアクションを取ってしまったのでしょうか？」

「あー、ううん、そうじゃないのー」ガバッと跳ねおき、タオルケットを胸元で押さえな

実を言えば、たやすく追いつめられる。先ほどの嬌声——内なる女性を搾りだしているような叫びを、いつだって愛でられる。

でも、私はじつくりと追いたてたい。股間の埋み火を手扇で煽りたい。胴の底から燻ってくる官能の熱に、お嬢様はじわじわと、そう、じわじわと炙られていく。炙られ、燃やされ、熾されて、いつの間にか、背骨を火柱に変えられる。

「ああ、あああつ！　だ、だめえつ、あつ、また！　わ、わたしつ、また……」

いつもキリリとしている眉が、女体の芯をのたうち回る快感に負けて、しどけなく八字を描く。びしょ濡れの腰が、トランポリンの住人になる。耐えきれずに笑い続ける膝。

お嬢様は、私の胸のなかで剥きだしになられる。いやらしく、かわいらしい姿をさらされる。

いつもの輝かしさはほんの少し翳り、そのかわりに所有感のタグを付けられる。

Freda ∨ ∨ …… 私のお嬢様。 ∨ ∨ E O M

これは私の、私だけのお嬢様だ。甘えを隠し味にした泣き声。熱く濡れた肌。この指にまとわりつくぬめり。そして、

「また……フリーダ、だめっ、だめだつてば、ああっ、フリーダあつ！」

すがりついてくる腕。

「……お嬢様……っ……」

責めているはずなのに感極まって、私はつい、右手に力を込めてしまった。

運が良いのか悪いのか、中指の付け根が、お嬢様の泣き所を捉えた。募る愉悦に背伸びして、厚めのフードをこわごわ脱ぎかけていた秘核を、ダイレクトに撃ってしまった。

「……………ッ！」

ここを弄られるときは、もしかしたら痛みが勝っているのかもしれない。クリトリスが

引き金するとき、遥様はたいてい無言で昇られた。目を見開き、舌を突きだし、耳を真っ赤に熟された。

「…………ツ、は！ は、はつ、はあつ、はつ、はつ、はあつ…………はあ、はあ、はあ…………あう…………うう…………」もぞもぞと顔をあげ、上目遣いで、「…………は、早すぎだよ…………昨夜のだって、まだ抜けきってないのに…………」

乱れた私の髪に指を絡められて、

「こんなに、たて続けにされたら…………おかしくなっちゃう…………今日一日、フリーダのエツチが残っちゃうよ…………」

Freda √√どうして。^^EOM

どうして、そのような表情で、そのようなお言葉を口にされるのですか？

「…………だから、ね？ フリーダ、もう、このへんで…………あつ？ きゃああつ！」

私が、私を抑えられるとでも？ そんなの無理です。
もう一度見たい。

もう何度でも聞きたい。

このような艶姿をまえにして、どうして指をくわえてガマンできるでしょう？ お嬢様を責めずにいられるでしょう？

私はショーツの股布ぶぶんを横にずらし、泣きぬれた裂け目に指を這わせた。一、二、三回の味見をしてゆつくりと沈みこませた。

「きゃひいつ！ ……い、いまは、だめーっ！」

「どうして、とお尋ねしてもよろしいですよね？」

「そ、その……したばかりだから……」

「何を、ですか？」

「だから……きゃあつ、いま、内側にさわられたらあ……」

抗議を無視して、ぬかるみに解きはなつ。

私はたぶん、遥様の内部を遥様より知悉している。洞窟に潜む無数の弱点を一つ残らず指摘できるし、そもそも、その三分の一は私自身が埋めこんだ地雷で、もう三分の一は私が研ぎあげた剣だ。

お嬢様の泣き声を声援に、私はとっておきの信管を起爆させる。俗に言うGスポットの少し奥。その一部分だけは、碁石の白から黒のように肌触りが変わる。遥様はスポットじたいを責められるより、間接的に罵られる方がお好きなのだ。くるりと手を回して指の背側を向け、骨の継ぎ目で擦りあげる。

「……きゃあつ、きゃうつ！ ああつ、また！ またつ、またまたまたあ！」

「また？ また何ですか、お嬢様」声が聞きたい。「さあ、ハッキリとおっしゃってください。お嬢様の身に何が起きているのか……それを教えていただけるとまで続けますよ」

この方を抱きしめているとき、私はにわか尋問官になる。この方のすべてを知りたい、

この方にすべてを知られたい。

心のなかでアイザックIIアシモフに中指を突きたてて、私はのったりと揺れる乳房もつかむ。まるでシロップ漬けの白桃をいただいている気分。触り心地じたいが甘く、愛おしい。

「そ、そんな……ああつ？ あ、ああ、あああ！」

じっくりと揉みこんで、私が味わっているのと同じものをご賞味いただく。遥様の乳頭は、すぐに食べすぎではちきれそうになる。頃合いを計って、安全弁をピクIIアツプ。取っ手じみたそれを捻りあげる。私に飼いならされた乳首は、こちらが心配になるくらい甘み^〴の虜だ。遥様の魂を、痙攣のお釣りまでつけて私に売りわたしてくる。

「……うああ、フリーダあ、す、ストップう！ ちょ、ちよつとスト……ッ！」

私はさらに、^〴ご褒美^〴のお返しとばかりに震える耳を舐めまわす。かたちの良い耳朶を軽く噛み、耳の穴に直接囁きを吹きこむ。お嬢様の全身を、淫らな三角測量の罠に追いかんでいく。

「あああ……ああ……あ？　うそっ、そんな早……だめっ、きゃう！」

「お嬢様、先ほど申しあげましたでしょう」右手の捻りを戻し、今度は指の腹で搔きむしる。「私にもわかる言葉で語っていただけるまでは続けます、と」

膺の粘膜よりも、その奥に埋めこまれた女性の脈を揺すぶる責めだ。ポイントをおへすに押しやるみたいに、指先を効かせる。お嬢様のそこに、私の指紋を覚えさせる。

「きゃああつ、ああつ！　だ、だつてえ……そ、そんなの言えないっ！　言えないよおっ！」

「なぜです？」

「だって、あれ……ふ、フリーダのわかる言葉　つて……あまりにも、ロコツで……きやううっ！」

遥様が、また全身の毛穴をいっせいに咲かせた。私の腕のなかで悶え続ける果実はいっそう潤み、かぐわしく匂った。

「露骨？ ……この国の文化的バイアスを受けている女性ならば、例の言葉で叫ばれるはずですよ」

右手の指をさらなる深奥に潜らせて、手の全面を淡い翳りと密着させる。拇指球あたりが、ちょうど秘核に当たっていた。これ幸いに、敏感すぎるセンサーをいびりあげる。

「あう、きゃうっ！ フリーダっ、おねが……だめっ、わ、わたしい、もう……ああっ、もう……」

あふれる蜜が指をふやかせ、濡れた柔毛が手のひらをくすぐってくる。私はさまざまな秘密の触感に酔いながら、お嬢様の股間を私のリズムにまつろわす。

「あれは女性と男性、異型間におけるプロトコルレベルの暗号です……そのはずですよ。私のマスターは、そのようにおっしゃって……」

その瞬間。電腦の一部が、自己増殖型のショートを起こした。

私は反射的に、電筋を固めてしまい——お嬢様への責めに予想外の力を加えてしまい——愛おしい弱点たちを、苦痛と紙一重のところまで虐めてしまった。

「……………ッ！」

お嬢様が火事場の力まで動員して背を反らし、さよなら胸をさらに離れさせる。なかを蹂躪していた指が喰いちぎられそうに締めつけられ、粘膜と指のすき間から熱いものが垂れおちる。

「……………あ」と私。ショートの余波でオートバランスを凍らせてしまったマヌケは、遥様から振りとばされていた。とっさのことで眼瞼筋だけを動かした——ふと、今朝の起床を思いだした。6時00分07秒の視界とはちがい、私の右隣では薄桃色の女体が躍動中だった。濡れ、震え、匂うそれは内なるクライマックスに向けて、黒髪の前からきれいな爪先まで緊張させている。優美な潜水鑑が浮きあがり、再び海原に沈むシーンを連想させられた。艦首が水面を叩いたときのように、地響きにも似た大音声が轟いた。

「……………うわあああーっ！」

飛沫の代わりに汗が散り、波の代わりにシートが乱れる。お嬢様のあちこちが、しなやかな曲線を躍らせて、私の眼を奪う。私をお嬢様でいっぱいにする。

「く……くふ……ッ！」

刺激が強すぎたのだろう、遥様は一度では終わらず、すらりとした内腿を震わせだした。魅せられて息さえ止めていた私に腕を伸ばし、今度は、お嬢様の方から抱きついてこられた。痙攣しながら絡みつき、半ば硬直している私に唇を押しつけられる。『ご褒美』の再現よろしく、私の口腔に遥様の吐息と唾液を送られてくる。

乱れきってからのもっと熱く、もっと激しかった。比べ物にならないほど甘かった。

しんがりを務めたのは、これまでで最大の震えと呻き。言葉ではないそれが、私の求めていた『暗号』を伝えてきた。私の身体に、直接注ぎこんでくれた。

——い、いくっ！ は、遥あ、いくうっ！

Freda > > …………… あ。 < < E O M

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>